

紫式部集の末尾をめぐる試考

——古典作品の終局の相というもの——

はじめに

いうまでもないことだが、古典文学の「作品」としての形態は、現代のわれわれの身近にあるそれを、無媒介で同一地平に並置して論ずることはできない——はずだが、ほんとうに「はず」と言い切れる研究の現状なのだろうか。「いうまでもない」といえるのだろうか。

もとより、古典——稿者の目のとどく範囲は平安時代の、それもごく一部に過ぎないが——では原作者の特定すらむずかしい場合も少なくなく、作者が判明している場合であつても、原本にふれることも肉薄することもできない作品ばかりであり、なおかつその伝本は、長年月の伝流の過程で損傷を受けていることも当然考慮されねばなるまい。

横 井 孝

さらに、——これこそ重要なことながら——首尾照応というごとき「構想」「構成」が作品形成の前提として成立しうるかどうかとも議論されなければ、無媒介でその概念を導入することはできない。現代文学でほとんど常識視されていることが、古典のそれでは必ずしも通用するとは限らないのである。

ここでは、まず、「作品」の外形を見定めることから始めたい。冒頭のそれについては、だいぶ以前に言及したことがあるので、いましばらくは措き、末尾をひとつの典型として考えるきっかけとしてみたい。

もう少し具体的にいうならば、こういうことである。

『紫式部日記』『更級日記』等々、前半が特定の主題に沿って一貫しているのに対して、末尾に近づくにしたがつて、

その「特定の主題」からはずれた短い記事の連続の形態であるかに見えることがあるはずである。現代の結末に向ける「構想」「構成」の感覚からすれば、いわばしどけないうちの結末に見えてしまうのである。それについて一体どのよう考えればよいのか。

一 『紫式部集』末尾の現状

実践女子大学本『紫式部集』の冒頭は、『百人一首』にも採られる有名な歌からはじまる。

- はやうよりわらはともだちなりし人
にとしごろへてゆきあひたるが、
ほのかにて、十月十日のほど、月に
きおひてかへりにければ
1 めぐりあひて見しやそれともわかぬまに
くもがくれにし夜はの月かけ

さらに、同本の末尾はこのようになってい

こせうしやうのきみのかきたまへりし
うちとけぶみの、もの、中なるを見つ

124 けてかゞせうなごんのもとに

くれぬまの身をばおもはで人の世の
あはれをしるぞかつはかなしき

125 たれか世にながらへてみむかきとめし
あとはきえせぬかたみなれども

返し

126 なき人をしのぶることもいつまでぞ
けふのあはれはあすのわが身を

「わらはともだち」との交流から小少将の君没後の、おそらく紫式部の晩年期と目される歌群でむすぶ編年の構成をみせて、——なかに歌序の乱れがあるにしても——みごととな統一された「作品」と見なすことができる。『紫式部集』の首尾照応を説く論を見かけるのは、実践女子大学本による立論だからではないか。

一方、陽明文庫本は、冒頭はほぼ同一ではあるものの、末尾は、

すまひ御覧するひ、うちわたりにて

110 (120) たつきなきたびのそらなるすまひをばあめもよ

にとふ人もあらじな

返し

111 (121) いどむ人あまたきこゆるも、しきのすまひうし
とは思しるやは

雨ふりてその日はこえむとまりにけりあい
なの／おほやけごとゞもや

(一行空白)

はつ雪ふりたる夕ぐれに、人の

112 (122) 恋しくてありふる程のはつ雪はきえぬることぞ
うたがはれける

返し

113 (123) ふればかくうさのみまさる世をしらであれたる

庭にももるはつ雪

114 (124) いづくとも身をやるかたのしられねはうしとみ
つ、もながらふる哉

となつていて、大きな入れ替わりがある。さらに114の直後、
丁をあらためず、二行分の空白ののち、

日記哥

三十講の五卷五月五日なり。けふしもあた
つらむ提婆品をおもふに、あした山よりも
この殿のさだめにや、木のみもひろひをか
せけむとおもひやられてこの殿のさだめに

や、木のみもひろひをかせけむとおもひや
られて

115 (65) たえなりやけふはさ月の五日とていつ、のまき
にあへるみのりも

(*「た」ミセケチ)

以下の「日記歌」本文が後接していることは、古本系の形
態の特徴としてよく知られている。

『集』の諸注釈を閲すれば、陽明本110番詞書の「すまひ
御覽ずるひ」について、

- (1) 寛弘四年(一〇〇七)八月二〇日(南波『全評釈』)
- (2) 寛弘六年(一〇〇九)七月二七日(萩谷『全注釈』)
- (3) 長和二年(一〇一三)七月二七日(岡『基礎』、竹内

『評釈』、田中『新注』)

という諸説がある。さらに次の112番以下の贈答についても
解釈がわかれており、

- (a) 夫宣孝との贈答歌(南波『全評釈』)
- (b) 晩年とは限らず、宮仕えを退いて後の友人との贈答
歌(南波『文庫』)

(c) 晩年の友人との贈答歌(岡『基礎』、今井『叢書』、
竹内『評釈』、田中『新注』)

などの諸説があり、また、実践女子大学本にない114番歌を
112・113の贈答とともに切り離し、「この末尾の歌が、編纂

時の心情を表す」と、「作品」であるところの『紫式部集』の終結部としての構成を指摘する廣田『世界』などもある。軽々にはいずれとも定めがたいが、(a)は110・111の贈答の(1)～(3)の諸説との取り合わせでは編年になじまなくなるし、また、(b)(c)を同一に見なしたとしても(2)説とはかなりの年次の間隙があることになる。「日記歌」の存在とともに、陽明本の形態は、実践女子大学本における編年を基準とするかに見えるそれとは距離が存することになる。そのこと自体はこれまでも幾度となく指摘されてきたこと⁽⁵⁾ではあるが、陽明本の「構成」とはいかなるものであるのか、あらためてその「形態」の問題として問われなすことになるであろう。

二 「散々なる本」の体裁

作品の末尾を考える際、いったん『紫式部集』から離れてみると、つぎのような奥書・識語の類（紙背文書も含む）が気にかかるのである。⁽⁶⁾

①書陵部藏『忠見集』（「三十六人集」五一〇・一一）

以散々木（本力）令書写之間、

不審其数多、殆雖不

得其意、如本写了、以証本可令校合者也

②書陵部藏『鴨女集（賀茂保憲女集）』

永仁五年三月十八日於西山菊房書写畢 承空

写本散々之間乍不審書之不及校合以証本可見合也

③金沢文庫保管『たまきはる』

本云

建保七年三月三日書了。西面にて昼つ方、風すこし吹に、少納言殿に読ませまいらせて、と。

是は存生之時令書。

存生之時、不見此草子。没後所見及也。高橋殿南向にて、老病之後、狂事歟。以養子之禪尼令書云々。

文章詞躰不尋常、雖恥披露、暫不破却。

（中略）

是以下は、遺跡反古之中、以自筆書寄。

初めも果てもなきいたづら事を、何となく書き捨てられたりけるを、見つけて、あとなる人の書きつくるなり。切れく散く選び集めて、書き写す。

④永観文庫蔵『普賢延命鈔私』紙背書状

改年御吉慶等誠申籠

候了、自他幸甚々々、

蒙仰候平家物語合

八帖本六帖
後三帖 献借候、後書

候事ハ散々なる様にて、

人の可御覽体物にも不候歟、

雖然、随仰献覽之候、

古反古共見苦物候、御覽

後、早可返預候也、事々期

拜謁候、恐々謹言、

正月十三日 深賢

⑤吉田幸一旧蔵伝伏見院筆本『松浦宮物語』

本云

このおくも本くちうせて、ハなれおちにけり、と。

(二三行分余白)

本云

貞観三年四月染殿院にてかきうつす

(一行分余白)

此物語たかき代の事にて、哥もこと葉もさまことに

ふるめかしう見えしを、蜀山の路のほとりよりさか

「(一一九ウ)

しきいまの世の人のつくりかへたるとて、むげにミ

ぐるしきことゞもみゆめり。いづれかまことならん。

もろこしの人の「うちぬるなか」といひけんそら事

のなかのそらごとおかし

一校了

本二

貞観三年四月十八日

そめ殿の院のにしのたいにてかきおハリぬとあり

花非花、霧非霧、夜半未天明去、来如春夢幾時、去似

朝雲無不見処(以下余白)

「(一二〇ウ)

⑥書陵部蔵『とはすがたり』卷五

本云、

こ、より又、刀して切られて候。おほ

つかなう、いかなる事にかとおぼえて候。

ここに掲げたのは、稿者の——文字どおりの——管見に

およんだものでしかない。おそらく、類例はすくなくない

に違いない。

後二者のうち⑤『松浦宮物語』の奥書は、「偽跋」であり、

著者である藤原定家の創作的所為と見なされていて、本来

の奥書・識語ではないのだが、——それにしても、定家の

時代に「ありうる奥書の体裁」として採用されたものとして、限定的な意味で有意であろうと思ひ、ここに掲げた。

また、⑥『』とは「ずがたり』の場合は、現存の孤本である旧桂宮本にいたる以前の、いずれかの段階の事実を率直に伝える一文であつて、『松浦宮物語』の場合とは異なるものである。

④は横井清によつて発見された『平家物語』関連資料である。「深賢」は、生年は未詳ながら弘長元年（一二二六）に示寂した醍醐寺の学僧であり、書状の日付「正月十三日」は建長三年（一二五一）に推定されている。表装（軸装）される際に宛所が断ち切られたらしく、誰への書状だったかはわからない。

『平家物語』の現存諸本は三または六の倍数の巻で構成されるものがほとんどであるが、深賢の所持していたそれは合わせて八帖の本——「本」が六帖、「後」が二帖——という中途半端な巻数の「平家物語」だったというのである。しかも「後二帖」は「散々なる様」であるという。横井清は、『平家物語』の成立が「三巻↓六巻↓一二巻」と増益される過程を経たとする牢固とした旧説に対して、

「本六帖」に「後二帖」が付随していた……「後」が形成されて行ったことで、前の「六帖」の内実が漸く

「本」と呼ばれるにいたつた……すなわち、いわば続篇の形成という新事態を反映しつつ、この平家物語は実に過渡的に「本六帖、後二帖」の「合八帖」編成を呈していたと考えてみたいのである。（傍点―著者）

と考察した。

『平家物語』が特定の作者によつて一回生起的に著述されたのではなく、さまざまな伝承・資料がいくつもの段階をへて糾合され編集されて「形成」された、その過渡期の八帖の本が、当時「散々なる様」をしながらも深賢の手許にあつたのだ、というわけである。横井清によるこの指摘は、右の奥書等の証言を解釈するうえで参考になるのではないか。

①「散々なる本」、②「写本散々」とはどのような形態の本だというのだろうか。

③『たまきはる』に藤原定家が「切れ々、散々、選び集めて、書き写す」と、著者・建春門院中納言（健御前）の「反古」の遺されていた状態を語っているように、単なる本文の不審、誤写の多さの指摘ではないことが類推されるのである。④には「人の御覧すべき体の物にも候はず」「古反古ども見苦しき物に候」といつていた。定家が切れ切れの反古を「編集」して『たまきはる』後篇をつくりあげた

のと同様な作業が、ほかの「作品」にも結果しているのではないか、と思わせるのに十分な資料といえよう。

岩波新大系の『たまきはる』の校注を担当した三角洋一は、当該作品の前半第一部を「本編」、後半第二部を「遺文」と名づけ、

遺文の記事の中には、内容的に本編と重複する記事があつて、(注―遺文中の記事)「43」建春門院の夢と「46」さぶらうべき所とは、(注―本編中の)「32」再出仕にいわば吸収合併されている。……これは「43」「46」をいわば下書きとして利用しつつ、本編のようなかたち⁽⁸⁾に書きあらためたものと解釈すべきであろう。

などという実例をとおして、「遺文」には、

書きとめておいた回想であるのに、適当な挿入箇所がなくて捨て置かれたものと、結果的に下書き段階の記事ということ、捨て去られたものがあつた……

のを、作者没後に弟・定家が遺稿を「選び集め」たのだ、という。「本編」末尾には「建保七年三月三日書了」という作者自身による奥書があつて、一応の「作品」結尾の形

態をととのえていたにも拘わらず、定家が遺稿をまとめ、書き継いで現存本を作つたというわけである。

『たまきはる』に限つたことではないが、「本編」「遺文」ともに作者の手になるものでありながら、内容が重複していたり、本文が錯綜・混乱していたりするというのは、通常は伝流過程での損傷の可能性を考へるべきところであろう。しかし、『たまきはる』の実例は、それに加えて、別人の「編集」操作が、さらに錯綜・混乱を増幅・増大させることがあることを実際に教えてくれる、興味深い例といふべきものであろう。

三 「増補・改編」の形態

『新撰朗詠集』編纂で知られる藤原基俊(一〇六〇～一一四二)に自撰の『基俊集』がある。書陵部蔵本(五〇一・七四三)は、二一八首を収めるが、一〇六番歌ののち、

これは、ほり川の院の御時、集めし、かばまいらせし。
これよりのちの歌は、いにしへ・いまのをかきあつめ
たるなり。

とあり、一行の空白をおいて一三丁のウラをおえ、次丁

に移って、「みちのくにのかみもとよりの朝臣のもとより……」と一〇七番以下の歌を記す。さらに、一九〇番歌を二六丁オモテに記して裏面の余白を残し、丁をかえて、

茲散木集式冊召

僊洞新本謄写后毎

輪直依

禁裏古本校正為蓋自正

月一日基俊集也

……(中略)……

戊寅臘月七日

藤譚玄誌

と識語を記し、さらに丁をかえて、「基俊」と題したのちに、『中古六歌仙』所収歌一九首のなかから一首欠く形で、一九一〜二一八番の一八首を掲載する。つまり、書陵部本『基俊集』は、

イ 応召歌集

ロ 補遺

ハ 『中古六歌仙』所収歌の増補

の三部からなり、自撰によるイ・ロに対して、ハはあきらかに後人の所為とわかる体裁をなしている。ロも、堀河帝

の「めし」に応じたイに対して、「いにしへ・いまの」自作を「かきあつめ」たという。これは一箇の「作品」のなかに、いくつかの位相を異にする操作が加わっている、わかりやすい実例である。

もともと私家集という分野は、自由というか融通無碍というべきか、自撰もあれば他撰もあり、物語や日記や自伝やさまざまな形態をとることが可能で、しかも、『基俊集』のごとき明確な構造の例はむしろすくなく、簡単に割り切ることできないような複雑な様相を呈する作品があり、むしろそのほうが例挙しやすい。そのひとつが『和泉式部集』である。重出歌が全体の二割強にもおよび、それが多く含まれる歌群「相互の關係は入り乱れ、錯綜していて、必ずしも明確な小歌群の存在を証明するものではない」⁽⁹⁾、「重出歌が必ずしも平面的な歌群の結合にのみ由来するものでない」とまでいわれたりする。

私家集の多くについては、「その私的な性格と資料的な性格などから、その伝承の過程に於て、任意に増補されたり修正されたり、又一首々々の独立性から、分離したりして、原型から変形せられる事が多い」(関根慶子)⁽¹⁰⁾、「二種以上の別系統の本を伝える例は枚挙にいとまなく、その別系統が生ずる理由や原因にあつても、集それぞれに特質があつて、必ずしも一つの物さしで測ることはできない」(森

本元子^①）、「勅撰集のように制約を受けず、本来、内容・形態は自由である。そのため一方では伝来の途上でしばしば増補や改編が行われ、異本を生じ、本来の形の不明なものが多い」（平野由紀子^②）など定評がある。『紫式部集』の場合もご多分に漏れず、ということになる。

ただし、ことは私家集に限らない。それは、さきの奥書等の証言でも明らかだろう。『平家物語』の成立過程については長年の議論の歴史があり、紙背書簡によってひとつの方向性が見えてきたわけである。『たまきはる』も、作者自身の奥書と定家の識語があるおかげで、その制作過程と現状との関係が判明した例であった。

しかし、日記や物語などにおいても、末尾に「増補・改編」「変形」される例がすくなくないことも、それぞれの分野で周知のはずである。

たとえば、『更級日記』は、冒頭部に上総からの上京の旅の記がひとつづきに続いているが、その後には年紀の空白がすくなくあつて、短小の記事が増加することはよく知られている。杉谷寿郎の章段分類（段数は玉井幸助・日本古典全書『更級日記』）によれば、

- (一) 第一段（寛仁四年・一三歳）～第三七段（万寿三年・一九歳）
- (二) 第三八段（長元五年・二五歳）～第四九段（長元九

年・二九歳およびその後の生活）

- (三) 第四九段（長暦三年・三二歳）～第六〇段（寛徳元年・三七歳）

- (四) 第六一段（寛徳二年・三八歳）～第七二段（永承六年・四六歳）

(五) 第七三段（天喜五年・五〇歳）～第八〇段（晩年）となり、それぞれの章段に付せられた年紀をみれば、その間の空隙が明瞭になるはずである。杉谷は、上京の旅の記が『日記』全体の五分の二にもなつて著しくアンバランスであり、「更級日記が後年になるほど記事量が減少する傾向にあることからみて、作者の構成力や持続力とも関わりがないとはいえない」という。

現存『更級日記』はすべてが定家本の本文を伝えるものにはかならず、了悟『光源氏物語本事』に「ごく一部とはいへ、非定家本の本文が紹介されているのを参看するかぎりでは、定家本に依拠するしかない現状にかなりの不安がある。が、とりあえずは、右のような『日記』の形態において享受されてきた歴史の重みを受けとめておくほかあるまい。

物語の例では、たとえば『大和物語』。

全体の三分の二を占める前篇（第一部）と後篇（第二部）とにわけられ、前篇が「宮廷のメディアによる言説、打聞き、

雑談」などの「近い時代の宮廷ゴシップの集成」であるのに対して、後篇は「蒼古の伝承的な説話」であり、異なる立場によって集積された話材が接ぎ木された説話集が、この「歌物語」だ、と田淵句美子は評するのである。⁽¹⁴⁾

しかも、『大和物語』が損傷を受けていることは、第一六九段の、

……かくて七八ねむ（年）ばかりありて、又おなじつかひ（御幣使）にさ、れて、やまとへいくとて、ぬで（井手）のわたりにやどりて、ゐてみれば、まへになむありける。かれに、みづくむ女どもがいふやう、⁽¹⁵⁾

という中途半端な末尾のかたちが、よくあらわしている。かつて、この段は、「物語の末尾切断」という形式による、書きさしの筆法なのだという評価が一部にあったが、「切断」という方法の実例は前期の物語の時代には存在せず、結局は物理的な脱落——つまり、伝流の過程における損傷にほかならないのであった。⁽¹⁶⁾

こうして私家集・日記・物語など、ここにあげたものは比較的わかりやすい、定評のある例をあげたが、各分野において同様な形態の作品、類例のすくなくないことは周知であろうと思う。

四 「原型」はどこにあるか

「作品」の末尾の体裁——首尾照応とか、物語のような末尾の形式を踏まえるといったことのない現実——つまり、いわばしどけない、結末ということを論う場合、『紫式部日記』のほうが『紫式部集』よりもさらにふさわしいといえよう。

萩谷朴の『紫式部日記全注釈』は上巻一九七一年刊、下巻一九七三年刊と三〇年前の著述ではあるが、いまだに最大の注釈であり、もつとも詳細をきわめる。その解説に『日記』全体の構造を、つぎのようにまとめてみせた。⁽¹⁷⁾

第一部 日記体記録篇

寛弘五年八月から同六年正月に及ぶ、敦成親王御生誕儀礼を中心としての後宮記録。

第二部 消息体評論篇

「このついでに、人の容貌を語りきこえさせば、ものいひ性なくやはべるべき」と前置きして、第五四節の容姿心性の描写批評にひき続き、宮廷女房の人性論へ移行する。

第三部 『前紫式部日記』の残欠本文

寛弘五年五月・六月の土御門第における体験的事実にかかる。

〔第四部〕 第一部補遺

寛弘七年正月の事実にかかる。

萩谷は、ここでいう「第二部」の末尾が第一部から通しての跋文であり、本日記の「第一次原初形態」をしめすものという。この見解を是とするとしても、第三部といま仮に第四部と称した「第一部補遺」も、「残欠」「補遺」というしかない、断片的詞章にすぎない。したがって、『日記』の結末部分は、第一部以降の全体の結尾を意識したものと思えない。つまりは、語弊のあるのを覚悟してあえていわざば、やはり「しどけない結末」ということなのだ。

『紫式部集』に話頭をもとめて。

この、比較的ちいさな私家集が、ほぼ編年によっていることはすでに論じ尽くされており、定家本系の形態ではそれが特に顕著の体裁をしていることは、本稿冒頭でもふれたとおりである。古本系・陽明文庫本のかたちでも、五〇番歌までは定家本系と一致しているように、ゆるやかに編年体をなしていると思われる。

しかも、古本系・陽明文庫本では、他の紫式部作品『紫式部日記』所収の和歌を、本編には掲載しないという姿勢をしめし、『集』の独自性——つまり独立した「作品」としての意識を読みとるのが廣田收である^⑧。巻末に後人の手によるとおぼしき「日記歌」を付載し、これが藤原定家による

よって本編に組み込まれた結果が定家本系の形態なのだ。と。

しかし、陽明本によっても定家本によっても、和歌配列に問題のあること、錯簡としてさまざまに「復元」案が模索されているにもかかわらず、議論が絶えないということは、いまだに納得のゆく解答が得られていない現状を示すものでもあろう。

前節で私家集の共通する問題にふれた際、その多くの「作品」が、自撰にせよ他撰にせよ「増補・改編」「変形」される例が多いという証言に耳をかたむけた。そうした定評を形成する論者たちはまた、その変形していることがむしろ通常ともいふべき状況であることから、当然「推移変遷した形から出来るだけ原型に復元」（関根）することが必要であり、「本文研究の究極の目的——作者の手になる本文——に立ち返る、それを復原することにあるべきもの」（森本）「原型再建が避けて通れない」（平野）と異口同音にいう^⑨。

『紫式部集』の撰者には自・他の両説があり、おおむねの意見は自撰にかたむいているようである。とするならば、なおさら「立ち返る」べき「作者の手になる本文」の「復元」が問われることになる。しかし、たとえば『紫式部日記』の場合はどうだろうか。萩谷の説くように、第一部から〔第

四部)までの配置を紫式部本人の所為とし、なおかつ現存の形態が「後人の、さかしらな竄入処置によるものではない」⁽²⁰⁾と、「現行本の形態は、早く平安末期以前に安定していた」と考えうるのだとしたら、あの「しどけな」く見える、結末もまた作者の所為によるものということになる。

ここでわれわれは、「作品」というものの像を問い直されることになるのではないか。「文学」も「作品」も平安時代の作者たちには、本来無縁の概念ではあったが、概念として存在しなかったとしてもそれらしき意識構造はありえたのではないかと想像するとしても、冒頭があれば結尾も対応して存在しなければならぬとするような観念は、とりあえず、とらわれる必要がないかに見える。

「作者の手になる本文」とは、「本文研究」においてはいわば理想の「原型」と称すべきであろう。しかし、作者自身が「増補・改編」「変形」を加えていたとするならば、何をもつて「原型」と考えるのか。わかりやすい、と先にふれた『基俊集』にしても「応召歌集」ができたのち、基俊みずから「いにしへ・いまの」自作を「かきあつめ」というのである。しかも後人の増補とみられる部分をも含めて、ひとつの「作品」として享受してきた人びとの存在を忘れてはなるまい。彼らにとって『基俊集』の「原型」はどれだけ意味のあることだったか。

くりかえしになるが、『紫式部集』の場合も「理想の原型」をもとめて「錯簡」とおぼしきものに対する「復元」案が提唱されてはきたが、論者個人のなかでは完結したところで、他者の納得するところではなかった。

これまでの研究史のなかで、それらは意味のないことではないだろう。しかし、その営為にみずから仮構するところの「理想の原型」を追尋しているに過ぎないのではないかと、と反照してみる必要があるのである。つづめていえば、「理想の原型」はほんとうに存在するのか、という命題を措定してみる必要があるだろう。

本稿は、最後はやや性急になりすぎて、論に具体性、説得力を欠いたきらいがあると思われる。しどけない議論になつてしまった。

まだ問題の扉の前に立つたばかりである。いましばらく、この命題をまえに、試行錯誤をしてゆかねばならぬと考える。

注

- (1) 本稿の問題意識に沿うものではないが、横井『女の物語』のながれ——古代後期小説史論』（加藤中道館、一九八四年一〇月刊）所収「序説〈女〉における物語史」「光源氏物語始末」で、物語の冒頭の話型について言及した。
- (2) 実践女子大学の本文は、久保田孝夫・廣田收・横井孝『紫式部集大成』（笠間書院、二〇〇八年五月刊）影印ならびに翻刻による。
- (3) 陽明文庫本の本文は、注(2)前掲書『紫式部集大成』所収の翻刻による。カッコ内の番号は、対応する実践女子大学の歌序をさす。
- (4) ここで参照した『紫式部集』（一部『紫式部日記』も含む）の諸注釈・研究書は以下の諸書と略号によった。
岡『基礎』Ⅱ岡一男『源氏物語の基礎的研究』（東京堂、増訂版一九六九年八月刊）
今井『叢書』Ⅱ今井源衛『紫式部』（人物叢書、吉川弘文館、一九五八年六月刊）
竹内『評釈』Ⅱ竹内美千代『紫式部集評釈』（桜楓社、一九六九年六月刊。改訂版Ⅱ一九七六年三月刊）
萩谷『全注釈』Ⅱ萩谷朴『紫式部日記全注釈・上／下』（角川書店、一九七一年一月／一九七三年三月刊）
- 南波『文庫』Ⅱ南波浩『紫式部集 付大式三位集・藤原惟規集』（岩波文庫、岩波書店、一九七四年一〇月刊）
南波『全評釈』Ⅱ南波浩『紫式部集全評釈』（笠間書院、一九八三年六月刊）
田中『新注』Ⅱ田中新一『紫式部集新注』（青簡舎、二〇〇八年四月刊）
廣田『世界』Ⅱ廣田收『紫式部と和歌の世界／一冊で読む紫式部家集』（武蔵野書院、二〇一二年五月刊）
(5) 廣田收『家集の中の「紫式部」』（新典社、二〇一二年九月）、同『紫式部集』歌の場と表現』（笠間書院、二〇一二年一〇月刊）などが最新の業績。
- (6) 以下の奥書等は、『私家集大成』、岩波新大系『とはずがたり たまきはる』、横井清『中世日本文化史論考』（平凡社、二〇〇一年六月刊）、吉田幸一『松浦宮物語伏見院本考』（古典聚英6、古典文庫、一九九二・一一刊）による。
- (7) 横井清『平家物語』成立過程の一考察——八帖本の存在を示す一史料』（『文学』第四二巻第二二号、一九七四年一二月）。のち、注(6)前掲書『中世日本文化史論考』に所収。
- (8) 三角洋一『たまきはる』解説』（岩波新大系『とはずがたり たまきはる』岩波書店、一九九四年三月刊、所収）

四三三～四三四頁。

(9) 平田喜信『平安中期和歌考論』(新典社、一九九三年五月刊)、一六頁。

(10) 関根慶子『中古私家集の研究——伊勢・経信・俊頼の集』(風間書房、一九六七年三月刊)、三八頁。

(11) 森本元子『私家集とは何か』(和歌文学論集4『王朝私家集の成立と展開』風間書房、一九九二年一月刊、所収)、一二頁。

(12) 平野由紀子『私家集研究の現在』(秋山虔編『平安文学史論考』武蔵野書院、二〇〇九年二月刊、所収)、五三三頁。

(13) 杉谷寿郎『更級日記の構造』(橋本不美男・杉谷・小久保崇明『更級日記 翻刻・校注・影印』笠間書院、一九八〇年四月刊、所収)、三〇五～三〇六頁。

(14) 田淵句美子『大和物語』瞥見——「人の親の心は闇にあらねども」を中心に」(谷知子・田淵句美子編『平安文学をいかに読み直すか』笠間書院、二〇一二年一〇月刊、所収)、八四頁。

(15) 阿部俊子『校本大和物語とその研究・増補版』(三省堂、一九七〇年)、六一七頁。

(16) 横井孝「物語・終焉のかたち——『狭衣物語』結尾の位相——」(実践女子大学文学芸資料研究所編『物語史研究

の方法と展望(論文篇)』同研究所、一九九九年三月刊、所収)。なお、『狭衣』結尾の風景——物語・終焉の位相として」と改題・修正して『源氏物語の風景』(武蔵野書院、近刊)に収めた。

(17) 萩谷朴「解説／作品について」前掲注(4)書『全注釈』下巻、所収。五一〇～五二六頁から摘記した。

(18) 廣田收『家集の中の「紫式部」』(新典社、二〇一二年九月刊)、同『紫式部集』歌の場と表現』(笠間書院、二〇一二年一〇月刊)など。

(19) 前掲注(10)(11)(12)書等による。
(20) 萩谷前掲注(17)書、五二七頁。

付記——本稿は廣田收・久保田孝夫両氏との「紫式部集研究会」(二〇一二年九月一〇・二一日、於同志社大学)の共同討議のなかから生まれた成果の一つである。両氏と横井による鼎談『紫式部集』研究の課題と展望』も近刊の予定。

(よこいたかし・実践女子大学教授)